

# 源氏物語

玉鬘

紫式部

青空文庫



火のくにおひいでたれば言ふことの  
皆恥づかしく頬ほの染まるかな（晶子）

年月はどんなにたつても、源氏は死んだ夕顔のことを少しも忘れずにいた。個性の違った恋人を幾人も得た人生の行路に、その人がいたならばと遺憾に思われることが多かった。右近は何でもない平凡な女であるが、源氏は夕顔の形見と思つて庇護するところがあつたから、今日では古い女房の一人になつて重んぜられもしていた。須磨すまへ源氏の行く時に夫人のほうへ女房を皆移してしまつたから、今では紫夫人の侍女になつているのである。善良な

おとなしい女房と夫人も認めて愛していたが、右近の心の中では、夕顔夫人が生きていたなら、明石夫人が愛されているほどには源氏から思われておいでになるであろう、たいした恋でもなかった女性たちさえ、余さず将来の保証をつけておいでになるような情け深い源氏であるから、紫夫人などの列にははいらなくても、六条院へのわたましの夫人の中にはおいでになるはずであるといつても悲しんでいた。西の京へ別居させてあつた姫君がどうなつたかも右近は知らずにいた。夕顔の死が告げてやりにくい心弱さと、今になって相手の自分であつたことは知らせないようにと源氏から言われたことでの遠慮とが、右近のほうから尋ね出すことをさせなかつた。そのうちに、乳母めのとの良人おつとが九州の少しょうに弉すに任ぜられ

たので、一家は九州へ下った。姫君の四つになる年のことである。乳母たちは母君の行くえを知ろうといろいろの神仏に願を立て、夜昼泣いて恋しがっていたが何のかいもなかった。しかたがない、姫君だけでも夫人の形見に育てていたい、卑しい自分らといっしよに遠国へおつれすることを悲しんでいると父君のほうへほめかしたとも思ったが、よいつてはなかった。その上母君の所在を自分らが知らずにいては、問われた場合に返辞へんじのしようもない。よく馴染なじんでおいでにならない姫君を、父君へ渡して立つて行くのも、自分らの気がかり千万なことであらうし、話をお聞きになつた以上は、いっしよにつれて行つてもよいと父君が許されるはずがないなどと言い出す者もあつて、美しくて、すでにもう高貴

な相の備わっている姫君を、普通の旅役人の船に乗せて立つて行く時、その人々は非常に悲しがった。幼い姫君も母君を忘れずに、「お母様の所へ行くの」

と時々尋ねることが人々の心をより切なくした。涙の絶え間もないほど夕顔夫人を恋しがって娘たちの泣くのを、

「船の旅は縁起を祝って行かなければならないのだから」

とも親たちは小言こごとを言った。美しい名所名所を見物する時、

「若々しいお気持ちの方で、お喜びになるでしょうから、こんな景色けしきをお目にかけてたい。けれども奥様がおいになつたら私たちは旅に出てないわけですね」

こんなことを言つて、京ばかりの思われるこの人たちの目には

帰って行く波もうらやましかつた。心細くなっている時に、船夫  
 たちは荒々しい声で「悲しいものだ、遠くへ来てしまった」とい  
 う意味の唄を唄う声が聞こえてきて、姉妹は向かい合って泣  
 いた。

船人もたれを恋ふるや大島のうら悲しくも声の聞こゆる  
 来し方も行方も知らぬ沖に出でてあはれ何処に君を恋ふらん

海の景色を見てはこんな歌も作っていた。金の岬を過ぎても  
 「千早振る金の御崎を過ぎれどもわれは忘れずしがのすめ神」と  
 いう歌のように夕顔夫人を忘れることができずに娘たちは恋しが

った。少弐一家は姫君をかしずき立てることだけを幸福に思つて任地で暮らしていた。夢などにたまさか夕顔の君を見ることもあった。同じような女が横に立っているような夢で、その夢を見たあとではいつもその人が病氣のようになることから、もう死んでおしまいになったのであらうと、悲しいが思うようになった。

少弐は任期が満ちた時に出京しようと思つたが、出京して失職しているより、地方にこのままいるほうが生活の楽な点があつて、思いきつて上京することもようしなかつた。その間に当人は重い病氣になつた。少弐は死ぬまぎわにも、もう十歳とおぐらいになつていて、非常に美しい姫君を見て、

「私までもお見捨てすることになれば、どんなに御苦勞をなされ



ることだろう、卑しい田舎いなかでお育ちになっていることももつた  
ないことと思っておりますが、そのうち京へお供して参つて、  
御肉身のかたがたへお知らせ申し、その先はあなた様の運命に任  
せるといたしましたも、京は広い所ですから、よいこともきつと  
あつて、安心がさせていただけると思ひまして、その実行を早く  
早くとあせるように思つておりましたが、希望の実現どころか、  
私はもうここで死ぬことになりました」

と悲痛なことを言つていた。三人の男の子に、

「おまえたちは何よりせねばならぬことを、姫君を京へお供する  
ことと思え。私のための仏事などはするに及ばん」

と遺言をした。父君のだれであるかは自身の家の者にも言わず

に、ただ大切にする訳のある孫であると言つてあつて、大事にか  
しずいているうちに、こんなふうでにわかになつたのであつたか  
ら、家族は心細がつて京への出立を急ぐのであるが、この国には  
故人の少弐に反感を持つていた人が多かつたから、そんな際に報  
復を受けることが恐ろしくて、今しばらく今しばらくとはばかつ  
て暮らしている間にも、年月がどんどんたつてしまつた。妙齡に  
なつた姫君の容ようぼう貌ぼうは母の夕顔よりも美しかつた。父親のほうの  
筋すぢによるのか、気け高たかい美がこの人には備わつていた、性質きじよも貴女  
らしくおおうであつた。故人の少弐の家に美しい娘むすめのいる噂うわさを  
聞いて、好色な地方人などが幾いくたり人も結婚を申し込んだり、手紙  
を送つて来たりする。失敬なことであるとも、とんでもないこと

であるとも思つて、だれ一人これに好意を持つてやる者はなかつた。

「容貌はまず無難でも、不具なところが身体からだにある孫ですから、結婚はさせずに尼にして自分の生きている間は手もとへ置く」

乳母めのとはこんなことを宣伝的に言っているのである。

「少弐の孫は片輪かたわだそうだ、惜しいものだ、かわいそうに」

と人が言うのを聞くと、乳母はまた済まない気がして、

「どんなにしても京へおつれしてお父様の殿様にお知らせしよう、まだごく小さい時にも非常におかわいがりになつていたのでから、今になつても決してそまつにはあそばすまい」

と乳母は興奮する。その実現されるように神や仏に願を立て

ていた。娘たちも息子たちも土地の者と縁組みをして土着せねばならぬように傾いていく。心の中では忘れないが京はいよいよ遠い所になっていった。大人おとなになつた姫君は、自身の運命を悲しんで一年の三度の長精進などもしていた。二十はたちぐらいになるとすべての美が完成されて、まばゆいほどの人になつた。この少しょう式しき一家のいる所は肥前の国なのである。その辺での豪族などは、少しょう式しきの孫うわさの噂を聞いて、今でも絶えず結婚を申し込んでくる、うるさいほどに。

大夫たゆうの監げんと言つて肥後に聞こえた豪族があつた。その国ではずいぶん勢いのある男で、強大な武力を持っているのである。そんな田舎いなかざむらい武士の心にも、好色的な風流気があつて、美人を多く妻さ

いしよう  
妾として集めたい望みを持っているのである。少弐家の姫君

のことを大夫の監は聞きつけて、

「どんな不具なところがあつても、自分はその点を我慢することにして妻にしたい」

と懇切に求婚をしてきた。少弐の人たちは恐ろしく思った。

「どんないい縁談にも彼女は耳をかさないで尼になろうとしています」

と中に立った人から断わらせた。それを聞くと監は不安がつて、自身で肥前へ出て来た。少弐家の息子たちを監は旅宿へ呼んで姫君との縁組みに助力を求めたのであった。

「成功すれば、両家は力になり合つて、あなたがたに武力の後援

を惜しむものですか」

などと言つてくれる監げんに二人の息子だけは好意を持ちだした。

「私たちも初めは不似合いな求婚者だ、お気の毒だと姫君のことを思つてましたが、考えてみると、自分たちの後ろ立てにするのには最も都合のいい有力な男ですから、この人に敵対をされては肥前あたりで何をすることも不可能だということがわかつてきました。貴族の姫君だと言つても、父君が打つちやつてお置きになるし、世間からも認められていないではしかたがありません。こんなに熱心になつている監と結婚のできるのはかえつて幸福だと思いますよ。この宿命のあるために九州などへ姫君がおいでになることにもなつたのでしよう。逃げ隠れをなすつても何になるも

のですか。負けてなんかいませんからね、監は。常識で考えられる以上の無茶なことでも監はしますよ」

と兄弟は家族をおどすのである。長兄の豊後介ぶんごのすけだけは監の味方でなかった。

「もったいないことだ。少弐の御遺言があるのだから、自分はどうしてもこの際姫君を京へお供しましょう」

と母や妹に言う。女たちも皆泣いて心配していた。母君がどうおなりになったか知れないようなことになって、せめて姫君を人並みな幸福な方にしないではと、自分らは念じているのに、田いなか舎武士ざむらいなどに嫁とつがせておしまいすることなどは堪えうることでないと思っていることも知らずに、自身の力を過信している監は、

手紙を書いて送ってきたりするのである。字などもちよつときれいで、唐紙とうしに香かおの薫かおりの染しませたのに書いて来る手紙も、文章も物になつてはいなかつた。また自身も親しくなつた少貳家の次男とつれ立つて訪たずねて来た。年は三十くらいの男で、背が高く、ものものしく肥つている。きたなくは思われないが、いろいろ先入主になつてゐることがあつて、見た感じがうとましい。荒々しい様子は見ただけでも恐ろしい気がした。血色がよくて快活ではあるが、涸かれ声で語り散らす。求婚者は夜に訪問するものになつてゐるが、これは風変わりな春の夕方のことであつた。秋ではないが怪しい気持ちいっ（何時いつとても恋しからずはあらねども秋の夕べは怪しかりけり）になつたのかもしれない。機嫌きげんをそこねまいと



して未亡人のおとどが出て応接した。

「お亡かくれになった少弐は人情味のたつぷりとあるりっぱなお役人でしたからぜひ御懇親を願いたいと思ひながら、こちらの尊敬心をお見せできなかつたうちにお気の毒に死んでおしまいになったから、そのかわりに御遺族へ敬意を表しようと思つて、奮発して、一所懸命になつて、しいて参りました。こちらにおいになる姫君が御身分のいいことを私は聞いていて、尊敬申してますが、妻になつていただききたいのだ。我輩わがはいは一家の御主人と思つて頭の上へ載せんばかりにしてですね、大事にいたしますよ。あなたがこの縁組みにあまり御賛成にならないというのは、私がこれまで幾いくたり人もものつまらない女と関係してきたことで、いやがられてい

るのではありませんか。たとえそんな女どもが私についているとしても、そいつらに姫君といつしよの扱いなどをするものですかい。我輩は姫君を後の位きさきから落とすつもりはない」

などと勝手なことを監げんは言い続けた。

「いえ、不賛成などと、そんなことはありません。非常に結構なお話だと私は思っているのですがね。何という不運なのでしょう、あの人は並み並みに一人前の女に成り切っていないところがありましてね、自分は結婚のできない身体からだだとあきらめています、かわいそうでも、私どもの力ではどうにもならないのでございませ

と、おとどは言った。

「決して遠慮をなさるには及びませんよ。どんな盲目めくらでも、いざりでも私は護まもつていつてあげます。我輩わがはいが人並みの身体に直してあげますよ。肥後一国の神仏は我輩の意志どおりに何事も加勢してくれまますからね」

などと監げんは誇うっていた。結婚の日どりも何日いつごろというようなことを監が言いうと、おとどのほうでは、今月は春の季の終わりで結婚によろしくないというような田舎めいた口実で断きわる。縁側から下りおりて行く時になつて、監は歌を作つくつて見せみせせたくなつた。やや長く考かんえてから言いい出です。

「君にもし心たがはば松浦まつらなるかがみの神をかけて誓はん

この和歌は我輩の偽らない感情がうまく表現できたと思います」と監は笑顔を見せた。おとどはすべてのことが調子はずれな田舎武士に、返歌などをする気にはなれないのであつたが、娘たちに歌を詠めと言うと、

「私など、お母さんだつてそうでしょう。自失している体よ」  
こう言つて聞かない。おとどは興味のない返歌をやつと出まかせふうに言つた。

年を経て祈る心のたがひなばかがみの神をつらしとや見ん

先刻からの気味悪さにおとどは慄え声ふるになつていた。

「お待ちなさい。そのお返事の内容だが」

監げんがのつそりと寄つて来て、腑ふに落ちぬという顔をするのを見て、おとどは真青まつさおになつてしまった。娘たちはあんなに言つていたものの、こうなつては氣強く笑つて出て行つた。

「それはね、お嬢様が世間並みの方でないことから、母がこの御縁の成立した時に、恨めしくお思ひにならないかということ、もうぼけております母が神様のお名などを入れて、変に詠よんだだけの歌ですよ」

とこじつけて聞かせた。正解したところで求婚者へのお愛想歌あいそなのであるが、

「ああもつとも、もつとも」

とうなずいて、監は、

「技巧が達者なものです。我輩は田舎者ではあるが賤民じゃないのです。京の人でもたいしたものではないことを我輩は知っています。軽蔑けいべつしてはいけませんよ」

と言ったが、もう一首歌を作ろうとして、できなかつたのかそのまま帰って行つた。次郎がすっかりあちらがたになつてゐるのを家族は憎みながらも、豊後介の助けを求めることが急であつた。どうして姫君にお尽くしすればよいか、相談相手はなし、親身の兄弟までが監に反対すると言つて、異端者扱いにして自分と絶交する始末である。監の敵になつてはこの地方で何一つ仕事はでき

ないだろう、手出しをしてかえって自分から不幸を招きはしまいかと豊後介は煩悶はんもんをしたのであるが、姫君が口では何事も言わずにこのことで悲しんでいる様子を見ると、気の毒で、そうなれば死のうと決心している様子が道理に思われ、豊後介は苦しい策をして姫君の上京を助けることにした。妹たちも馴染なじんだ良人おつとを捨てて姫君について行くことになった。あてきと言つて、夕顔夫人の使っていた童女は兵部ひょうぶの君という女房になつていて、この女たちが付き添つて、夜に家を出て船に乗つた。大夫たゆうの監げんはいつたん肥後へ帰つて四月二十日ごろに吉日を選んで新婦を迎えに来ようとしているうちに、こうして肥前を脱出するのである。姉は子供もおおぜいになつていて同行ができないのである。行く人、

残る人が名残なごりを惜しんで、また見る機会おくりのないことを悲しむのであつたが、行く人にとつては長い年月をここで送つたのではあつても、見捨てがたいほど心の残るものは何もこの土地になかつた。ただ松浦の宮の前の海岸の風光と姉娘と別れることだけがだれにもつらかつた。顧みもされた。

浮うき島しまを漕こぎ離れても行く方やいづくとまりと知らずもある  
かな

行くさきも見えぬ波路に船出して風に任する身こそ浮きたれ  
初めのは兵部の作で、あとののは姫君の歌である。心細くて姫君



は船でうつ伏しになっていた。こうして逃げ出したことが肥後に知れたなら、負けぎらいな監は追つて来るであろうと思われるのが恐ろしくて、この船は早船といつて、普通以上の速力が出るように仕かけてある船であつたから、ちようど追い風も得て危ういほどにも早く京をさして走つた。響の灘も無事に過ぎた。海上生活二、三日のちである。

「海賊の船なんだろうか、小さい船が飛ぶように走つて来る」  
などと言う者がある。惨酷な海賊よりも少弐の遺族は大夫の監をもつと恐れていて、その追つ手ではないかと胸を冷やした。

憂きことに胸のみ騒ぐひびきには響の灘も名のみなりけり

と姫君は口ずさんでいた。川尻かわじりが近づいたと聞いた時に船中の人ははじめてほっとした。例の船子かこは「唐泊からどまりより川尻押すほどは」と唄うたっていた。荒々しい彼らの声も身に沁しんだ。豊後ぶんご介すけはしみじみする声で、愛する妻子も忘れて来たと言われ、どうなるであろう、その歌のとおりにも自分も皆捨てて来た、どうなるであろう、力になるような郎党は皆自分がつれて来てしまった。自分に対する憎悪ぞうおの念から大夫の監は彼らに復讐をしないであろうか、その点を考えないで幼稚な考えで、脱出して来た、こんなことが思われて、気の弱くなつた豊後介は泣いた。「胡地妻子虚こちのさいしをむなし棄損くすつ」とこう兄の歌っている声を聞いて兵部も悲しんだ。自分

のしていることは何事であろう、愛してくれる男にわかにならな  
いて出て来たことをどう思っているであろうと、こんなことが思  
われたのである。京へはいつでも自分らは帰って行く邸やしきなどはな  
い、知人の所といつても、たよつて行つてよいほど頼もしい家も  
ない、ただ一人の姫君のために生活の根拠のできていた土地を離  
れて、空想の世界へ踏み入ろうとする者であると豊後介は考えさ  
せられた。姫君をもどうするつもりでいるのであると自身であ  
きれながらも今さらしかたがなくてそのまま一行は京へはいった。  
九条に昔知っていた人の残っていたのを捜し出して、九州の人た  
ちは足どまりにした。ここは京の中ではあるがはかばかしい人の  
住んでいる所でもない町である。外で働く女や商人の多い町の中

で、悲しい心を抱いて暮らしていたが、秋になるといつそう物事が身に沁しみんで思われて過去からも、未来からも暗い影ばかりが投げられる気がした。信頼されている豊後介も、京では水鳥が陸へ上がったようなもので、職を求めてづるる手蔓も知らないのであった。今さら肥前へ帰るのも恥ずかしくてできないことであつた。思慮の足りなかつたことを豊後介は後悔するばかりであるが、つれて来た郎党も何かの口実を作つて一人去り二人去り、九州へ逃げて帰る者ばかりであつた。無力な失職者になつている長男に同情したようなことを母のおとどが言うのと、

「私などのことは何でもありません。姫君を護まもつていいことができれば、自分の郎党などは一人もなくなつてもいいのですよ。ど

んなに自分らが強力な豪族になつたつても、姫君をああした野蛮な連中に取られてしまえば、精神的に死んでしまつたのも同然ですよ」

と豊後介は慰めるのであった。

「神仏のお力にすがればきつと望みの所へ導いてくださるでしょうから、お詣りまいをなさるがよいと思います。ここから近い八幡やわたの宮は九州の松浦、箱崎はこざきと同じ神様なのですから、あちらをお立ちになる時、お立てになつた願もありますから、神の庇護で無事に帰京しましたというお礼参りをなさいますせ」

と豊後介は言つて、姫君に八幡詣りやわたまいをさせた。八幡のことにくわしい人に聞いておいて、御師おしという者の中に、昔親の少弐が

知っていた僧の残っているのを呼び寄せて、案内をさせたのである。

「このつぎには、仏様の中で長谷はせの観音様は靈驗のいちじるしいものがあると支那しなにまで聞こえているそうですから、お参りになれば、遠国にいて長く苦勞をなすった姫君をきつとお憐あわれみになつてよいことがあるでしょう」

また豊後介は姫君に長谷詣はせもうでを勧めて実行させた。船や車を用いずに徒歩で行くことにさせたのである。かつて経験しない長い路みちを歩くことは姫君に苦しかったが、人が勧めるとおりにして、つらさを忍んで夢中で歩いて行つた。自分は前生にどんな重い罪障があつてこの苦しみに堪えねばならないのであろう、母君はも

う死んでおいでになるにしても、自分を愛してくださいさるならその国へ自分をつれて行ってほしい。しかしまだ生きておいでになるのならお顔の見られるようにしていただきたいと姫君は観音を念じていた。姫君は母の顔を覚えていなかった。ただ漠然と親というものの面影を今日まで心きように作つて来ているだけであつたが、こうした苦難に身を置いては、いつそう親というものの恋しさが切実に感ぜられるのであつた。ようやく椿市つばいちという所へ、京を出て四日めの昼前に、生きている気もしないで着いた。姫君は歩行らしい歩行もできずに、しかもいろいろな方法で足を運ばせて来たが、もう足の裏が腫はれて動かせない状態になつて椿市で休息をしたのである。頼みにされている豊後介と、弓矢を持った郎党

が二人、そのほかは僕しもべと子供侍が三、四人、姫君の付き添いの女房は全部で三人、これは髪の上から上着を着た壺装束つぼしようぞくをしていた。それから下女が二人、これが一行で、派手はでな長谷詣りの一行ではなかった。寺へ燈明料を納めたりすることとをここで頼んだりしているうちに日暮れ時になった。この家の主人あるじである僧が向こうで言っている。

「私には今夜泊めようと思っっているお客があつたのだのに、だれを勝手に泊めてしまったのだ、物知らずの女どもめ、相談なしに何をしたのだ」

おこ怒っているのである。九州の一行は残念な気持ちでこれを聞いていたが、僧の言つたとおりに参詣者の一団が町へはいつて来た。



これも徒歩で来たものらしい。主人らしいのは二人の女で召使の男女の数は多かつた。馬も四、五匹引かせている。目だたぬようにしているが、きれいな顔をした侍などもついていた。主人の僧は先客があつてもその上にどうかしてこの連中を泊めようとして、道に出て頭を搔かきながら、ひよこひよここと追ついし従しょうをしていた。

かわいそうな気はしたが、また宿を変えるのも見苦しいことであるし、面めん倒どうでもあつたから、ある人々は奥のほうへはいり、残りの人々はまた見えない部屋へやのほうへやつたりなどして、姫君と女房たちとだけはもとの部屋の片すみのほうへ寄つて、幕のようなもので座敷の仕切りをして済ませていた。あとの客も無作法な人たちではなかつた。遠慮深く静かで、双方ともつつましい相い

客になつていた。このあとから来た女というのは、姫君を片時も忘れずに恋しがっている右近であつた。年月がたつにしたがつて、いつまでも続けている女房勤めも気がさすように思われて、煩はんも悶もんのある心の慰めに、この寺へたびたび詣まいつているのである。

長い間の経験で徒歩の旅を大儀とも何とも思つているのではなかつたが、さすがに足はくたびれて横になつていた。こちらの豊後介は幕の所へ来て、食事なのであろう、自身で折敷おしきを持つて言つていた。

「これを姫君に差し上げてください。膳ぜんや食器なども寄せ集めのものです、まったく失礼なのです」

右近はこれを聞いていて、隣にいる人は自分らの階級の人では

ないらしいと思った。幕の所へ寄つてのぞいて見たが、その男の顔に見覚えのある気がした。だれであるかはまだわからない。豊後介のごく若い時を知っている右近は、肥えて、そうして色も黒くなっている人を今見て、直ぐには思い出せないのである。

「三条、お召しですよ」

と呼ばれて出て来る女を見ると、それも昔見た人であつた。昔の夕顔夫人に、下の女房ではあつたが、長く使われていて、あの五条の隠れ家にまでも来ていた女であることがわかつた右近は、夢のような気がした。主人である人の顔を見たく思つても、それはのぞいて見られるようなふうにはしていなかった。思案の末に右近は三条に聞いてみよう、ひょうとうだ兵藤太と昔言われた人もこの男で

あろう、姫君がここにおいでになるのであろうかと思うと、気が急いで、そしてまた不安でならないのであつた。幕の所から三条を呼ばせたが、熱心に食事をしている女はすぐに出て来ないので、右近は憎くさえ思つたが、それは勝手すぎた話である。やつと出て来た。

「どうもわかりません。九州に二十年も行つておりました卑しい私どもを知つておいでになるとおつしやる京のお方様、お人違いではありませんか」

と言う。田舎風いなかに真赤まっかな搔練かいねりを下に着て、これも身体からだは太くなつていた。それを見ても自身の年が思われて、右近は恥ずかしかつた。

「もつと近くへ寄つて私を見てごらん。私の顔に見覚えがありますか」

と言つて、右近は顔をそのほうへ向けた。三条は手を打つて言つた。

「まああなたでいらつしやいましたね。うれしいつて、うれしいつて、こんなこと。まああなたはどちらからお参りになりました。奥様はいらつしやいますか」

三条は大声をあげて泣き出した。昔は若い三条であつたことを思い出すと、このなりふりにかまわぬ女になっていることが右近の心を物哀れにした。

「おとどさんはいらつしやいますか。姫君はどうおなりになりま

した。あてきと言った人は」

と、右近はたたみかけて聞いた。夫人のことは失望をさせるのがつらくてまだ口に出せないのである。

「皆、いらっしやいます。姫君も大人おとなになっておいでになります。何よりおとどさんにこの話を」

と、言つて三条は向こうへ行つた。九州から来た人たちの驚いたことは言うまでもない。

「夢のような気がします。どれほど恨んだかしのれない方にお目にかかることになりました」

おとどはこう言つて幕の所へ来た。もうあちらからも、こちらからも隔てにしてあつた屏風びょうぶなどは取り払つてしまった。右近

もおとども最初はものが言えずに泣き合った。やっとおとどが口を開いて、

「奥様はどうおなりになりました。長い年月の間夢にでもいらつしやる所を見たいと大願を立てましたがね、私たちは遠い田舎の人になっていたのですからね、何の御様子も知ることができません。悲しんで、悲しんで、長生きすることが恨めしくてならなかったのですが、奥様が捨ててお行きになった姫君のおかわい顔を見しては、このまま死んでは後世ごせの障りさわになると思いましたね、今でもお護りもしています」

おとどの話し続ける心持ちを思つては、昔あの際に気おくれがして知らせられなかつたよりも、幾倍かのつらさを味わいながら

も、絶体絶命のようになって、右近は、

「お話ししてもかいたくないことでございますよ。奥様はもう早くお亡かくれになったのですよ」

と言った。三条も混ぜて三人はそれから咽むせ返つて泣いていた。日が暮れたと騒ぎ出し、お籠こもりをする人々の燈明が上げられたと宿の者が言つて、寺へ出かけることを早くと急がせに來た。そのためにも双方ともまだ飽き足らぬ気持ちで別れねばならなかつた。「ごいっしょにお詣まいりをしましょうか」

とも言つたが、双方とも供の者の不思議に思うことを避けて、おとどのほうではまだ豊後介にも事実を話す間がないまままで同時に宿坊を出た。右近は人知れず九州の一行の中の姫君の姿を目に



探っていた。そのうちに美しい後ろ姿をした一人の、非常に疲労した様子で、夏の初めの薄絹ひとえの単衣ひとえのような物を上から着て、隠された髪かみの透き影のみごとそうな人を右近は見つけた。お気の毒であるとも、悲しいことであるとも思つてながめたのである。少し歩き馴なれた人は皆らくらくと上みじうの御堂へ着いたが、九州の一行は姫君を介抱かいほうしながら坂を上るので、初夜の勤めの始まるころにようやく御堂へ着いた。御堂の中は非常に混雑していた。右近が取らせてあつたお籠こもり部屋べやは右側の仏前に近い所であつた。九州の人の頼んでおいた僧は無勢力なのか西のほうの間で、仏前に遠かつた。

「やはりこちらへおいでなさいませ」

と言つて、右近が召使をよこしたので、男たちだけをそのほうに残して、おとどは右近とのかいこう邂逅を簡単に豊後介へ語つてから、右近の部屋のほうへ姫君を移した。

「私などつまらない女ですが、ただ今の太政大臣様にお仕えしておりますのでね、こんな所に出かけていまして不都合はだれもしないであろうと安心していられるのですよ。地方の人らしく見ますと、生意気にお寺の人などはけいべつ軽蔑した扱いをしますから、姫君にもつたいなくて」

右近はくわしい話もしたのであるが、仏前の経声の大きいのに妨げられて、やむをえず仏を拜んでだけいた。

この方をお捜しくださいませ、お逢あわせくささいませとお願い

しておりましたことをおこなえくださいましたから、今度は源氏おとどの大臣がこの方を子にしてお世話をなさりたいと熱心おぼしめに思召すことが実現されますようにお計らいくださいませ、そうしてこの方が幸福におなりになりますように。

と祈っているのであつた。国々の参詣さんけい者が多かつた。大和やまとの守かみの妻も来た。その派手はでな参詣さんけいぶりをうらやんで、三条は仏に祈っていた。

「大慈大悲の観音様、ほかのお願いはいっさいいたしません。姫君を大弐だいにの奥様でなければ、この大和の長官の夫人にしていただきたいと思ひます。それが事実になりました、私どもにも幸福が分けていただけました時に厚くお礼をいたします」

額に手を当てて念じているのである。右近はつまらぬことを言うにがにがしく思った。

「あなたはとんでもないほど田舎者になりましたね。中将様は昔だってどうだったでしょう、まして今では天下の政治をお預かりになる大臣おとどですよ。そうしたお盛んなお家の方で姫君だけを地方官の奥さんという二段も三段も低いものにしてそれでいいのですか」

と言うと、

「まあお待ちなさいよあなた。大臣様だって何だってだめですよ。大式のお館やかたの奥様が清きよ水みづの観世音寺へお参りになった時の御様子をご存じですか、帝みかど様の行幸みゆきがあれ以上のものとは思えません。

あなたは思い切ったひどいことをお言いになりますね」

こう言つて、三条はなお祈りの合掌を解こうとはしなかった。

九州の人たちは三日参籠さんろうすることにしていた。右近はそれほど長くないようとは思つていなかったが、この機会おりに昔の話も人々としたく思つて、寺のほうへ三日間参籠すると言わせるために僧を呼んだ。雑用をする僧は願文がんもんのことなどもよく心得ていて、すばやくいろいろのことを済ませていく。

「いつもの藤原瑠璃君ふじわらのるぎみという方のためにお経をあげてよくお祈りすると書いてください。その方にね、近ごろお目にかかることができましたからね。その願果たしもさせていただきます」

と右近の命じていることも九州の人々を感動させた。

「それは結構なことでしたね。よくこちらでお祈りしているせいでしよう」

などとその僧は言っていた。御堂の騒ぎは夜通し続いていた。

夜が明けたので右近は知った僧の坊へ姫君を伴って行った。静かに話したいと思うからであろう。質素なふうで来ているのを恥ずかしがっている姫君を右近は美しいと思つた。

「私は思いがけない大きなお邸やしきへお勤めすることになりました、

たくさんな女の方を見ましたが、殿様の奥様の御容貌ごきりように比べて

よいほどの方はないと長い間思っていました。それにお小さいお姫様がまたお美しいことはもつともなことですが、そのお姫様はまたどんなに大事がられていらつしやるか、まったく幸福そのも

のそのような方ですがね、こうして御質素なふうをなすつていらつしやる姫君を、私は拝見して、その奥様や二条院のお姫様に姫君が劣つていらつしやるように思われませんかのでうれしゅうございます。殿様はおつしやいますのですよ、自分の父君の帝様みかどの時から宮中の女御やお后きさき、それから以下の女性は無数に見ているが、ただ今の帝様のお母様のお後の御美貌と自分の娘の顔とが最もすぐれたもので、美人とはこれを言うのであると思われつて。私は拝見していて、そのお后様は存じませんが、お姫様はまだ小さくて将来は必ずすぐれた美人におなりになるでしょうが、奥様の御美貌に並ぶ人はないと思うのですよ。殿様も奥様のお美しさの価値を十分ご存じでいらつしやるでしょうが、御自分のお

口から最上の美人の数へお入れにはなりにくいのですよ。こんなこともお言いになることがあるのですよ、あなたは私と夫婦になれたりしてもつたいなく思いませんかなどと戯談じょうだんをね。お二人のそろいもそろったお美しさを拝見しているだけで命も延びる気がするのですよ。あんな方はあるものでもありません、私がそんなに思う六条院の奥様にどこ一つ姫君は劣つていらつしやいません。物は限りがあつてすぐれた美貌と申しても円光を後ろに負つていらつしやるわけではありませんけれど、これがほんとうに美しいお顔と申し上げていいのでございましょう」

右近は微笑ほほえんで姫君をながめていた。少弐しょうにの未亡人もうれしそうである。



「こんなすぐれたお生まれつきの方を、もう一步で暗い世界へお沈めしてしまうところでしたよ。惜しくてもつたいなくて、家も財産も捨てて頼りたよにしてよい息子むすこにも娘にも別れて、今ではかえって知らぬ他国のような心細い気のする京へ帰って来たのですよ。あなた、どうぞいい智慧ちえを出してください。姫君の御運を開いてあげてくださいまし。貴族のお家に仕えておいでになる方は、便宜がたくさんあるでしょう。お父様の大臣が姫君をお認めくださいますように計らってくださいまし」

とおとどは言うのであった。姫君は恥ずかしく思つて後ろを向いていた。

「それがね、私はつまらない者ですけれど、殿様がおそばで使つ

ていてくださいますからね、昔のいろいろな話を申し上げる中で、  
どうなさいましたろうと私が姫君のことをよく申すものですから、  
殿様が、ぜひ自分の所へ引き取りたく思う。居所を聞き込んだら  
知らせるがいいとおっしゃるのですよ」

「源氏の大臣様はどんなにおりっぱな方でも、今のお話のような  
よい奥様や、そのほかの奥様も幾いくたり人かいらつしやるのでしよう。  
それよりもほんとうのお父様の大臣へお知らせする方法を考えて  
ください」

とおとどが言うのを聞いて、右近ははじめて夕顔夫人を愛して、  
死の床に泣いた人の源氏であったことを話した。

「どうしてもお亡かくれになった奥様を忘れられなく思おぼしめ召してね。

奥様の形見だと思つて姫君のお世話をしたい、自分は子供も少なくて物足りないのだから、その人が捜し出せたなら、自分の子をお家へ迎えたように世間へは知らせておこうと、それはずっと以前からそうおつしやるのですよ。私の幼稚な心弱さから、奥様のお亡なくなりになりましたことをあなたがたにお知らせすることができないでおりますうちに、御主人が少弐におなりになつたでしょう。それはお名を聞いて知つたのですよ。お暇いとまご乞いに殿様の所へおいでになりましたのを、私はちらとお見かけしましたが、何をお尋ねすることもできないじまいになつたのですよ。それでもまだ姫君をあゝの五条の夕顔の花の咲いた家へお置きになつて赴任をなさるのだと思つていました。まあどうでしょう、もう一歩で

九州の人になつておしまいになるところでございましたね」

などと人々は終日昔の話をしたり、いっしよに念誦ねんずを行なつたりしてゐた。御堂へ参詣する人々を下に見おろすことのできる僧坊であつた。前を流れて行くのが初瀬川である。右近は、

「二もとの杉すぎのたちどを尋ねずば布留川ふるのべに君を見ましや

ここでうれしい逢瀬おうせが得られたと申すものでございます」と姫君に言つた。

初瀬川はやくのことは知らねども今日けふの逢瀬に身さへ流れぬ

と言つて泣いている姫君はきわめて感じのよい女性であつた。これだけの美貌びぼうが備わつていても、田舎風いなかのやぼな様子が添つていたなら、どんなにそれを玉の瑕きずだと惜しまれることであらう、よくもこれほどりっぱな貴女にお育ちになつたものであると、右近は少弐未亡人に感謝したい心になつた。母の夕顔夫人はただ若々しくおおよような柔らかい感じの豊かな女性というにすぎなかつた。これは容姿けだかに気高さのあるすぐれた姫君と見えるのであつた。右近はこれによつて九州という所がよい所であるように思われたが、また昔の朋輩ほうばいが皆不恰好ぶかつこうな女になつていたのであつたら不思議でならなかつた。日が暮れると御堂みだうに行き、翌日はまた坊に帰つて念誦ねんずに時を過ごした。秋風が溪たにの底から吹き上がつて

来て肌はださむ寒さの覚えられる所であつたから、物寂しい人たちの心はまして悲しかった。姫君は右近の話から、人並みの運も持たないように悲観をしていた自分も、父の家の繁栄と、低い身分の人を母として生まれた子供たちさえも皆愛されて幸福になっていることがわかつた上は、もう救われる時に達したのであるかもしれないという氣になつた。帰る時は双方でよく宿所を尋ね合つて、またわからなくなつてはと互いに十分の警戒をしながら別れた。右近の自宅も六条院に近い所であつたから、九州の人の宿とも遠くないことを知つて、その人たちは力づけられた氣がした。

右近は旅からすぐに六条院へ出仕した。姫君の話をする機会を早く得たいと思う心から急いだのである。門をはいるとすでにす

べての空気に特別な豪華な家であることが感ぜられるのが六条院である。来る車、出て行く車が無数に目につく。自分などがこの家の一人の女房として自由に出入りをするのもまばゆい気のことである。と右近に思われた。その晩は主人夫婦の前へは出ずに、部屋へ引きこもつて右近はまた物思いをした。翌日は昨日自宅から上がつて来た高級の女房が幾いくたり人もある中から、特に右近が夫人に呼び出されたのを、右近は誇らしく思った。源氏も夫人の居間にいた。

「どうして長く家へ行っていたのかね。少しこれまでとは違っているのではないか。独身者はこんな所にいる時と違って、自宅では若返ることもできるのだらう。おもしろいことがきつとあつた

ろう」

などと例の困らせる気の戯談じょうだんを源氏が言う。

「ちようど七日お暇いとまをいただきだったのでございますが、おもしろいことなどはなかなかないのでございます。山へ参りましてね。お気の毒な方を発見いたしました」

「だれ」

と源氏は尋ねた。突然その話をするのも、これまで夫人にしているくない昔の話から筋を引いていることを、源氏にだけ言えば夫人があとで話をお聞きになって不快がられないかなどと右近は迷つていて、

「またくわしくお話を申し上げます」



と言つて、ほかの女房たちも来たのでそのまま言いさしにした。灯ひなどをともさせてくつろいでいる源氏夫婦は美しかった。女に王よおうは二十七、八になつた。盛りの美があるのである。このわずかな時日のうちにも美が新しく加わつたかと右近の目に見えるのであつた。姫君を美しいと思つて、夫人に劣つていないと見たものの思いなしか、やはり一段上の美が夫人にはあるようで幸福な人と不運な人とはこれだけの相違があるものらしいなどと右近は思つた。寢室にはいつてから、脚あしを撫なでさせるために源氏は右近を呼んだ。

「若い人はいやな役だと迷惑がるからね。やはり昔なしみ馴染の者は心が双方でわかつていてどんなことでもしてもらえるよ」

と源氏が言っているのを聞いて、若い女房たちは笑っていた。

「そうですよ。どんなことでもさせていただいて私たちは結構なんですけれど、あの御戯談ごじやうだんに困るだけね」

などと言っているのであった。

「奥さんも昔馴染どうしがあまり仲よくしては機嫌きげんを悪くなさらない。決して寛大な方ではないから危あぶないね」

などと言って源氏は笑っていた。愛あい嬌きやうがあつて常よりもま

た美しく思われた。このごろは公職が閑散なほうに変わってしまった、自宅でもものんきに女房などにも戯談を言いかけて相手をためすことなどを楽しむ源氏であつたから、右近のような古ふる女おんなにも戯れてみせるのである。

「発見したって、どんな人かね。えらいしゅげんじゃ修験者などと懇意になつてつれて来たのか」

と源氏は言った。

「ひどいことをおつしやいます。あの薄命な夕顔のゆかりの方を見つめましたのでございます」

「そう、それは哀れな話だね、これまでどこにいたの」

と源氏に尋ねられたが、ありのままには言いにくくて、

「寂しい郊外に住んでおいでになつたのでございます。昔の女房も半分ほどはお付きしてしまつてございますから、以前の話もいたしまして悲しゆうございました」

と右近は言っていた。

「もうわかったよ。あの事情を知っていらつしやらない方がいられるのだからね」

と源氏が隠すように言うと、

「私がおじやまなの、私は眠くて何のお話だかわからないのに」  
と女によおう王そでは袖で耳をふさいだ。

「どんな容貌きりよう、昔の夕顔に劣っていない」

「あんなにはおなりにならないかと存じておりましたけれど、とてもおきれいにおなりになったようでございます」

「それはいいね、だれぐらい、この人とはどう」

「どういたしまして、そんなには」

と右近が言うと、

「得意なようで恥ずかしい。何にせよ私に似ていれば安心だよ」  
わざと親らしく源氏は言うのであった。

その話を聞いた時から源氏はおりおり右近一人だけを呼び出して姫君の問題について語り合った。

「私はあの人を六条院へ迎えることにするよ。これまでも何かの場合によく私は、あの人に行くえを失ってしまったことを思つて暗い心になつていたのだからね。聞き出せばすぐにその運びにしなればならないのを、怠つていることでも済まない気がする。お父さんの大臣に認めてもらう必要などはないよ。おおぜいの子供に大騒ぎをしていられるのだからね。たいした母から生まれたのでもない人がその中へはいつて行つては、結局また苦勞をさせ

ることになる。私のほうは子供の数が少ないのだから、思いがけぬ所で発見した娘だとも世間へは言っておいて、貴公子たちが恋の対象にするほどにも私はかすずいてみせる」

源氏の言葉を聞いていて、右近は姫君の運がこうして開かれて行きそうであるとうれしかった。

「何も皆思おぼしめ召し次第でございます。内大臣へお知らせいたしますのも、あなた様のお手でなくてはできないこととでございます。不幸なお亡なくなり方をなさいました奥様のかわりにもともかくも助けておあげになりましたなら罪がお軽くなります」

と右近が言うと、

「私をまだそんなふうにも責めるのだね」

源氏は微笑ほほえみながらも涙ぐんでいた。

「短いはない縁だったと、私はいつもあの人のことを思っている。この家に集まって来ている奥さんたちもね、あの時にあの人を思ったほどの愛を感じた相手でもなかったのが、皆あの人のように短命でないことだけで、私の忘れっぽい男でないのを見届けているのが多いのに、あの人の形見にはただ右近だけを世話していることが残念な気のこととは始終だったのに、そうして姫君を私の手もとへ引き取ることができればうれしいだろう」

こう言つて、源氏は姫君へ最初の手紙を書いた。あの末摘花すえつむはなに幻滅を感じたことの忘れられない源氏は、そんなふう逆境に育つた麗人の娘、大臣の実子も必ずしも期待にそむかないとは思

われなない不安さから手紙の返事の書きようでまずその人を判断しようとしたのである。まじめにこまごまと書いた奥には、

こんなに私があなただのことを心配していますことは、

知らずとも尋ねて知らん三島江に生おふる三稜みくりのすぢは絶えじ  
な

とも書いた。右近はこの手紙を自身で持つて行って、源氏の意向を説明した。姫君用の衣服、女房たちの服の材料などがたくさん贈られた。源氏は夫人とも相談したものらしく、衣服係の所にできていた物も皆取り寄せて、色の調子、重ねの取り合わせの特



にすぐれた物を選んで贈ったのであったから、九州の田舎いなかに長くいた人々の目に珍しくまばゆい物と映ったのはもつともなことである。姫君自身は、こんなにっぱな品々でなくても、実父の手から少しの贈り物でも得られたのならうれしいであろうが、知らない人と交渉を始めようなどとは意外であるというように、それとなく言つて、贈り物を受けることを苦しく思うふうであつたが、右近は母君と源氏との間に結ばれた深い因縁を姫君に言つて聞かせた。人々も横から取りなした。

「そうして源氏の大臣の御厚意でごりっぱにさえおなりになりましたなら、内大臣様のほうからもごく自然に認めていただくことができず。親子の縁と申すものは絶えたようでも絶えないもの

でございます。右近でさえお目にかかりたいと一心に祈って  
 した結果はどうでございます。神仏のお導きがあつたではござい  
 ませんか。御双方ともお身体からださえお丈夫でいらつしやればきつと  
 お逢あいになれる時がまいります」

とも慰めるのである。まず早く返事と言つて皆がかりで姫君  
 を責めて書かせるのであつた。自分はもうすつかり田舎者なのだ  
 からと姫君は書くのを恥かずかしく思うふうであつた。用箋ようせんは薰た  
きもの物の香を沁しませた唐紙とうしである。

数ならぬみくりや何のすぢなればうきにしもかく根をとどめ

けん

とほのかに書いた。字ははかない、力のないようにも見えるものであったが、品がよくて感じの悪くないのを見て源氏は安心した。姫君を住ます所をどこにしようかと源氏は考えたが、南の一廓はあいた御殿もない。華奢かしやな生活のここが中心になっている所であるから、人出入りもあまりに多くて若い女性には気の毒である。中宮のお住居すまいになっっている一廓の中には、そうした人にふさわしい静かな御殿もあいているが、中宮の女房になったように世間へ聞かれてもよろしくないと源氏は思つて、少しじみな所ではあるが東北の花散里はなちるさとの住居の中の西の対は図書室になっているのを、書物をほかへ移してそこへ住ませようという考えになった。

近くにゐる人も氣だての優しい、おとなしい人であるから、花散里と親しくして暮らすのもいいであろうと思つたのである。こうなつてから夫人にも昔の夕顔の話を源氏はしたのであつた。そうした秘密があつたことを知つて夫人は恨んだ。

「困るね。生きてゐる人のことでは私のほうから進んで聞いておいてもらわねばならないこともありますかね。たとえばこんな時にも昔のそうした思い出を話すのはあなたが特別な人だからですよ」

こう言つてゐる源氏には故人を思う情に堪えられない様子が見えた。

「自分の経験ばかりではありませんがね、他人のことでもよく

見ましたがね、女というものはそれほど愛し合っている仲でなくともずいぶん嫉妬しつとをするもので、それに煩わされている人が多いから、自分は恐ろしくて、好色な生活はすまいと念がけながらも、そのうち自然に放ほう縦しょうにもなつて、幾いく人たりもの恋人を持ちました。が、その中で可憐かれんで可憐でならなく思われた女としてその人が思い出される。生きていたなら私は北の町にいる人と同じくらいには必ず愛しているでしょう。だれも同じ型の人はないものですが、その人は才女らしい、りっぱなというような点は欠けていたが、上品でかわいかった」

などと源氏が言うと、

「でも、明石あかしの波にくらべるほどにはどうだか」

と夫人は言った。今も北の御殿の人を、不当にすばらしく愛さ  
れている女であると夫人はねたんでいた。小さい姫君がかわい  
ふうをして前に聞いているのを見ると、夫人の言うほうがもつと  
もであるかもしれないと源氏は思った。それらのことは皆九月の  
うちのことであつた。

姫君が六条院へ移つて行くことは簡単にもいかなかつた。まず  
きれいな若い女房と童女を捜し始めた。九州にいたころには相当  
な家の出でありながら、田舎へ落ちて来たような女を見つけ次第  
に雇つて、姫君の女房に付けておいたのであるが、脱出のことが  
にわかに行なわれたためにそれらの人は皆捨てて来て、三人のほ  
かにはだれもいながつた。京は広い所であるから、市女いちめというよ

うな者に頼んでおくと、上手じょうずに捜してつれて来るのである。だれの姫君であるかというようなことはだれにも知らせてないのである。いったん右近の五条の家に姫君を移して、そこで女房を選えりとのえもし衣服したくの仕度も皆して、十月に六条院へはいった。源氏は新しい姫君のことを花散里に語った。

「私の愛していた人が、むやみに悲観して郊外のどこかへ隠れてしまっていたのですが、子供もあつたので、長い間私は捜させていたのですがなんら得る所がなくて、一人前の女になるまでほかに置いたわけなのですがその子のことが耳にはいった時にすぐにも迎えておかなければと思つて、こちらへ来させることにしたのです。もう母親は死んでいるのです。中将をあなたの子供にして

もらっているのですから、もう一人あつたっていいでしょう。世話をしてやってください。簡単な生活をして来たのですから、田舎風なことが多いでしょう。何かにつけて教えてやってください」

「ほんとうにそんな方がおありになったのですか。私は少しも知りませんでした。お嬢さんがお一人で、少し寂しすぎましたから、いいことですね」

花散里はおおように言っている。

「母親だった人はとても善良な女でしたよ。あなたも優しい人だから安心してお預けすることができるのです」

などと源氏が言った。

「母親らしく世話を焼かせていただくこともこれまでではあまり少



なくて退屈でしたから、いいことだと思いません、ごいつしよに住むのは」

と花散里は言っていた。女房たちなどは源氏の姫君であること  
を知らずに、

「またどんな方をお迎えになるのでしょうか。同じ所へね。あまり  
に奥様を古物扱いにあそばすではありませんか」

と言っていた。

姫君は三台ほどの車に分乗させた女房たちといっしよに六条院  
へ移つて来た。女房の服装なども右近が付いていたから田舎いなかびず  
に調べられた。源氏の所からそうした人たちに入り用な綾あやそのほ  
かの絹布類は呈供してあつたのである。

その晩すぐに源氏は姫君の所へ来た。九州へ行っていた人たちは昔光源氏という名は聞いたこともあつたが、田舎住まいをしたうちにそのまれな美貌びぼうの人がこの世に現存していることも忘れていて今ほのかな灯ひの明りに几帳きちょうの綻ほころびから少し見える源氏の顔を見ておそろしくさえなつたのであつた。源氏の通つて来る所の戸口を右近があげると、

「この戸口をはいる特権を私は得ているのだね」

と笑いながらはいつて、縁側の前の座敷へすわつて、

「灯があまりに暗い。恋人の来る夜のようにではないか。親の顔は見たいものだと聞いているがこの明りではどうだろう。あなたはそう思いませんか」

と言つて、源氏は几帳を少し横のほうへ押しやった。姫君が恥ずかしがって身体からだを細くしてすわっている様子に感じよさがあった。源氏はうれしかった。

「もう少し明るくしてはどう。あまり気どりすぎているように思われる」

と源氏が言うので、右近は燈心を少し搔かき上げて近くへ寄せた。  
「きまりを悪がりすぎますね」

と源氏は少し笑った。ほんとうにと思つていような姫君の目つきであつた。少しも他人のようには扱わないで、源氏は親らしく言う。

「長い間あなたの居所がわからないので心配ばかりさせられまし

たよ。こうして逢<sup>あ</sup>うことができて、まだ夢のような気がしてね。それに昔のことが思い出されて堪えられないものが私の心にあるのです。だから話もよくできません」

こう言つて目をぬぐう源氏であつた。それは偽りでなくて、源氏は夕顔との死別の場を悲しく思い出しているのであつた。年を数えてみて、

「親子であつてこんなに長く逢えなかつたというようなことは例もないでしょう。恨めしい運命でしたね。もうあなたは少女のように恥ずかしがつてばかりいてよい年でもないのですから、今日までの話も私はしたいのに、なぜあなたは黙つてばかりいますか」と源氏が恨みを言うのを聞くと、何と言つてよいかわからぬほ

ど姫君は恥ずかしいのであつたが、

「足立たずで（かぞいろはいかに哀れと思ふらん三とせになりぬ足立たずして）遠い国へ流れ着きましたころから、私は生きておりましたことか、死んでおりましたことかわからないのでございます」

とほのかに言うのが夕顔の声そのままの語音ごいんであつた。源氏は微笑を見せながら、

「あなたに人生の苦しい道をばかり通らせて来たむく酬いは私がしないでだれにしてもらえますか」

と言つて、源氏は聡明そうめいらしい姫君の物の言いぶりに満足しながら、右近にいろいろな注意を与えて源氏は歸つた。

感じのよい女性であつたことをうれしく思つて、源氏は夫人にもそのことを言つた。

「野蛮な地方に長くいたのだから、気の毒なものに仕上げられて  
いるだろうと私は軽蔑けいべつしていたが、こちらがかえつて恥ずかし  
くなるほどでしたよ。娘にこうした麗人を持つているということ  
を世間へ知らせるようにして、よくおいでになる兵部卿ひょうぶきょうの宮  
などに懊惱おうのうをおさせするのだね。恋愛至上主義者も私の家では  
きまじめな方面しか見せないのも妙齡の娘などが無いからなのだ。  
たいそうにかしずいてみせよう、まだ成つていない貴公子たちの  
懸想けんそうぶりをたんと拝見しよう」

と源氏が言うと、

「変な親心ね。求婚者の競争をあおるなどとはひどい方」

と女によおう王は言う。

「そうだった、あなたを今のような私の心だったらそう取り扱  
うのだった。無分別に妻などにはしないで、娘にしておくのだった」  
夫人の顔を赤らめたのがいかにも若々しく見えた。源氏は硯すずりを  
手もとへ引き寄せながら、無駄むだ書きのように書いていた。

恋ひわたる身はそれながら 玉たま鬢かづら いかなる筋を尋ね来つら  
ん

「かわいそうに」

とも独ひとりごと言いしているのを見て、玉鬘の母であつた人は、前に

源氏の言つたとおりに、深く愛していた人らしいと女王は思った。源氏は子息の中将にも、こうこうした娘を呼び寄せたから、氣をつけて交際するがよいと言つたので、中将はすぐに玉鬘の御殿へ訪たずねて行つた。

「つまらない人間ですが、こんな弟がおりますことを御念頭にお置きくださいませ、御用があればまず私をお呼びになつてください。こちらへお移りになりました時も、存じないものでお世話をいたしませんでした」

と忠実なふうに言うのを聞いて、眞実のことを知つている者はきまり悪い氣がするほどであつた。物質的にも一所懸命の奉



仕をしていた九州時代の姫君の住居も現在の六条院の華麗な設備に思い比べてみると、それは田舎らしいたまらないものであったようにおとどなどは思われた。すべてが洗練された趣味で飾られた気高い家けだかにいて、親兄弟である親しい人たちは風采ふうさいを始めとして、目もくらむほどりっぱな人たちなので、こうなつてはじめて三条も大式を軽蔑けいべつしてよい気になつた。まして大夫の監げんは思ひ出すだけでさえ身ぶるいがされた。何事も豊後介ぶんごのすけの至誠の賜たまもの物であることを玉鬘も認めていたし、右近もそう言つて豊後介を賞ほめた。確しかとした規律のある生活をするのにはそれが必要であると言つて、玉鬘付きの家従や執事が決められた時に豊後介もその一人に登用された。すっかり田舎上がりの失職者になつていた

豊後介はにわかには朗らかな身の上になった。かりにも出入りする便宜などを持たなかつた六条院に朝夕出仕して、多数の侍を従えて執務することのできるようになったことを豊後介は思いがけぬ大幸福を得たと思つていた。これらもすべて源氏が思いやり深さから起こつたことと言わねばならない。

年末になつて、新年の室内装飾、春の衣裳いしやうを配る時にも、源氏は玉鬘を尊貴な夫人らと同じに取り扱つた。どんなに思ひのほかによい趣味を知つた人と見えても、またどんなまちがつた物の取り合わせをするかもしれぬという不安な気持ちもあつて、玉鬘のほうへはすでに衣裳にでき上がった物を贈ることにしたが、その時にほうぼうの織物師が力いっぱい念を入れて作り出した厚

織物の細長や小桂こうちぎの仕立てたのを源氏は手もとへ取り寄せて見た。

「非常にたくさんありますね。奥さんたちなどにもそれぞれよい物を選えつて贈ることにしよう」

と源氏が夫人に言ったので、女王は裁縫係の所にでき上がっている物も、手もとで作らせた物もまた皆出して源氏に見せた。紫の女王はこうした服飾類を製作させることに趣味と能力を持っている点でも源氏はこの夫人を尊重しているのである。あちらこちらの打ち物の上げ場から仕上がって来ている糊のりをした打ち絹も源氏は見比べて、濃い紅べに、朱の色などとさまざまに分けて、それを衣ころも櫃びつ、衣服箱などに添えて入れさせていた。高級な女房た

ちがそばにいて、これをそれに、それをこれにというように源氏の命じるままに贈り物を作っているのであつた。夫人もいつしよに見ていて、

「皆よくできているのですから、お召しになるかたのお顔によく似合いそうなのを見立てておあげなさいまし。着物と人の顔が離れ離れなのはよくありませんから」

と言うと、源氏は笑つて、

「素知らぬ顔であなたは着る人の顔を想像しようとするのですね。それにしてもあなたはどれを着ますか」

と言つた。

「鏡に見える自分の顔にはどの着物を着ようという自信も出ませ

ん」

さすがに恥ずかしそうに言う女王であつた。紅梅色の浮き模様のある紅紫の小桂こうちぎ、薄い臙脂紫えんじむらさきの服は夫人の着料として源氏に選ばれた。桜の色の細長に、明るい赤い搔練かいねりを添えて、この姫君の春着が選ばれた。薄いお納戸色に海草貝類が模様になつた、織り方にたいした技巧の跡は見えながらも、見た目の感じの派手はででない物に濃い紅の搔練を添えたのが花散里はなちるさと。真赤まっかな衣服に山吹やまぶきの花の色の細長は同じ所の西の対の姫君の着料に決められた。見ぬようにしながら、夫人にはひそかにうなずかれるところがあるのである。内大臣がはなやかできれいな人と見えながらも艶えんな所の混じっていない顔たまかずらに玉鬢たまかずらの似ていることを、この黄

色の上着の選ばれたことで想像したのであった。色に出して見せないのであるが、源氏はそのほうを見た時に、夫人の心の平静でないのを知った。

「もう着る人たちの容貌きりようを考えて着物を選ぶことはやめることにしよう、もらった人に腹をたてさせるばかりだ。どんなによくできた着物でも物質には限りがあつて、人の顔は醜くても深さのあるものだからね」

こんなことも言いながら、源氏は末摘すえつむはな花の着料に柳の色の織物に、上品な唐草からくさの織られてあるのを選んで、それが艶な感じのする物であつたから、人知れず微笑ほほえまれるのであつた。梅の折り枝ちようの上に蝶ちようと鳥の飛びちがっている支那風しなな気うちぎのする白い桂うちぎに、

濃い紅の明るい服を添えて明石<sup>あかし</sup>夫人のが選ばれたのを見て、紫夫人は侮辱されたのに似たような気が少しした。空蟬<sup>うつせみ</sup>の尼君には青<sup>あおにび</sup>鈍色の織物のおもしろい上着を見つけ出したのへ、源氏の服に仕立てられてあつた薄黄の服を添えて贈るのであつた。同じ日に着るようにとどちらへも源氏は言い添えてやった。自身の選定した物がしつくりと似合っているかを源氏は見に行こうと思つたのである。

夫人たちからはそれぞれの個性の見える返事が書いてよこされ、使いへ出した纏<sup>てんとう</sup>頭もさまざまであつたが、末摘花は東の院にいて、六条院の中のことでないから纏頭などは気のきいた考えを出さねばならぬのに、この人は形式的にするだけのことはせずにい

られぬ性格であつたから纏頭も出したが、山吹色の桂うちぎの袖そでぐち口のあたりがもう黒ずんだ色に変色したのを、重ねもなく一枚きりなのである。末摘すえつむはな花女なによおう王おうの手紙は香かおの薰かおりのする檀紙だんしの、少し年数物になつて厚く膨ふくれたのへ、

どういたしましたよう、いただき物はかえつて私の心を暗くいたします。

着て見ればうらみられけりから衣ごろもかへしやりてん袖そでを濡ぬらして

と書かれてあつた。字は非常に昔風である。源氏はそれをなが



めながらおかしくてならぬような笑い顔をしているのを、何があつたのかというふうに夫人は見ていた。源氏は使いへ末摘花の出した纏頭てんとうのまずいを見て、機嫌きげんの悪くなつたのを知り、使いはそつと立つて行つた。そしてその侍は自身たちの仲間とこれを笑い話にした。よけいな出すぎたことをする点で困らせられる人であると源氏は思つていた。

「りつぱな歌人なのだね、この女王は。昔風の歌詠よみはから衣、袂濡たもとるといふ恨みの表現法から離れられないものだ。私などもその仲間だよ。凝り固まつていて、新しい言葉にも表現法にも影響されないところがえらいものだ。御前などの歌会の時に古い人が友情を言う言葉に必ずまどいという三字が使われるのもいや

なことだ。昔の恋愛をする者の詠む歌には相手を悪く見てあだびと仇人  
 という言葉を三句めに置くことにして、それをさえ中心にすれば  
 前後は何とでもつくと思つたものらしい」

などと源氏は夫人に語つた。

「いろんな歌の手引き草とか、歌に使う名所の名とかの集めてあ  
 るのを始終見えて、その中にある言葉を抜き出して使う習慣の  
 ついている人は、それよりほかの作り方ができないものと見える。  
 常陸ひたちの親王のお書きになつた紙屋紙かみやがみの草紙くさじというのを、読めと  
 言つて女によおう王さんが貸してくれたがね、歌の髓ずい脳のう、歌の病やまい、そ  
 んなことがあまりたくさん書いてあつたから、もともとそのほう  
 の才分の少ない私などは、それを見たからといって、歌のよくな

る見込みはないから、むずかしくしてお返ししましたよ。それに通じている人の歌としては、だれでもが作るような古いところがあ  
るじゃないかね」

滑稽こっけい滑稽こっけいでならないように源氏に笑われている末摘花の女王はか  
わいそうである。夫人はまじめに、

「なぜすぐお返しになりましたの、写させておいて姫君にも見せておあげになるほうがよかったですでしょうにね。私の書物の中にも古いその本はありましたけれど、虫が穴をあけて何も読めませんでした。その御本に通じていて歌の下手へたな方よりも、全然知らない私などはもつとひどく拙つたないわけですよ」

と言った。

「姫君の教育にそんなものは必要でない。いったい女というものは一つのこと熱中して専門家的になっていることが感じのいいものではない。といつて、どの芸にも門外の人であることはよくないでしょうがね。ただ思想的に確かな人にだけしておいて、ほかは平穩で瑕きずのない程度の女に私は教育したい」

こんなことを源氏は言っていて、もう一度末摘花へ返事を書くうとするふうのないのを、夫人は、

「返しやりてん、とお言いになったのですから、もう一度何とかおっしゃらないでは失礼ですわ」

と言つて、書くことを勧めていた。人情味のある源氏であつたから、すぐに返歌が書かれた、非常に楽々と、

かへさんと言ふにつけても片しきの夜の衣を思ひこそやれ

ごもつともです。

という手紙であつたらしい。



# 青空文庫情報

底本：「全訳源氏物語 中巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年11月30日改版初版発行

1994（平成6）年6月15日39版発行

※このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>) で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

※校正には、2002（平成14）年1月15日44版を使用しました。

入力：上田英代

校正：kompass

2003年7月31日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。



# 源氏物語

玉鬘

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

著者 紫式部

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>